オピニオン

これからの大学
ー新しい教育の可能性ー

日本学術振興会 理事長・慶應義塾 学事顧問　安西 祐一郎

1．主体性を知識が支え、勇気を経験が支える

今の高校生や大学生の親の世代が学生だったころと比べると、産業の構造は大きく変わりました。製造業に従事する労働人口が減り、サービス産業の人口が増えたのは、その一端です。サービスやデザインの付加価値をつけられる製造業、小さくても世界のトップシェアを取れる技術を磨く企業など、製造関係にも活きいきとした職場がたくさんあります。全体としては、多くの職場が、企業だけでなく、NPO 法人、行政、医療、教育、研究開発などを含め、大量生産・年功序列・終身雇用の時代から、多様な仕事・実力主義・転職 OK の時代へと、大きく変化しつつあります。

人と違ったことを考え、人と違った経験を積み、人と違った人生を歩む、そういう人間のほうが社会に貢献でき、喜びも糧も得ることができる、新しい時代が来ています。介護産業、学習産業など、一人ひとりの人間に対応しなければならないソフト的な業種の雇用は急速に伸びています。東日本大震災の支援に活躍したのは、責任の押しつけあいで具体的な行動を取らなかった大人たちではなく、自分の判断で行動した若い人たちでした。

答えのない問題に自分で答えを見つける主体性と勇気を身につけること、それがこれからの若い人たちの心がけるべきことです。それには、実は知識と経験が必要です。昼夜を分かたず学問の研鑽に励み、いろいろな社会体験を積んで判断力と行動力を持つことが、上のような時代に社会で活躍できるようになるために必須の条件になります。知識と経験を掴むことを通して主体性と勇気を身につけさせてくれる環境、これからの大学はこういう環境を与えてくれなければなりません。また、こうした環境を用意している大学学部に進学することが、これからの人生を開花させてくれるはずです。

2．良い大学とはどんな大学？

上に述べたような環境を、いろいろな背景や関心を持った多様な学生たちに、容易にアクセスできるようにしている大学が、これからの良い大学です。

こうした大学に要請されるのは、たとえば、科目が体系化されており、どういう科目群を何年かかってどういう順序で履修すればどんな知識が得られるのか、履修前から分かることです。その目安は、難易度や履修順序が分かるように科目に番号がついているか（ナンバリング）、すべての科目に詳細なシラバスがあるか、他大学のどんな科目と単位互換の仕組みが整備されているかなどの点です。これからは、科目のナンバリングシステムが整備されているかどうかが、良い大学かどうかの一つの分かれ目になっていきます。

また、上に述べたような社会の大変化を熟知している教員が多数いることも、良い大学であるための条件です。このことは、マスコミなどで知名度の高い教員がいるということとは違います。答えのない問題に答えを見つけ出す力を身につけさせるのが教育の最大の課題であることを熟知して、それを実践している教師に巡り合うことが、良い大学で良く学ぶために必須になっていきます。

第三に、一年生のときから少人数のディベートクラスで学べるかどうか、世の中のナマの問題を授業で扱っているかどうか、長期短期を問わず留学の機会やそのための資金援助がしっか

り整備されているかどうか、教員の大多数が外国語（とくに英語）を話し、書くことを実践しているか、学内の規程や窓口の文章が日本語だけでなく英語でも書いてあるか、国内外を問わず企業、行政機関、教育機関、病院、NPO 法人など、多彩な場で経験を積めるサービスを用意しているか、いろいろな立場の学生に対応できる奨学金を大学として用意しているかなども、良い大学で良く学べるための条件です。

なお、良い大学に入学する前に高校生のときからやっておくべきがあります。大学の良さを吸収できるようになるには、たとえば、これからの「新しい社会」とはどんなところか、高校生のときから経験しておくことです。高校生のためのインターンシップ、ボランティア、健全なアルバイト、旅行なども含め、いろいろな方法がありますが、大事なことは、新しい社会で働くとはどういうことか、大学の高学年で就活の時期になってから知ろうと思っても遅すぎるということです。高校生から大学初年次は、新しい社会を身をもって知る絶好の機会なのです。

3．良く学ぶとはどのように学ぶこと？

人は、自分の好きなこと、関心のあることにはいくらでもチャレンジしますが、興味のないことに努力せよと言われても、本当の力は出ません。また、勉学自体は楽なことではありませんから、追い詰められた状況がないかぎり、自分の能力を限界まで知らしめてくれる勉学をすることはできません。極限の練習を繰り返して初めて自分を乗り越えられるスポーツや芸術の鍛錬と同じことです。

（他人にとってではなく自分にとって）良い大学に籍を置くことができたとき、自分自身で何かの目標や関心を持つこと、そのうえで自分を追い込める環境に身を置くことが、良く学ぶための条件です。これらの条件が満たされていれば、学校を出て何年も経ってから新しいことを学ぼうとするときに大事になる「学習の方法」を、知らず知らずのうちに身につけることができるようになります。

良く学べるための第二の条件は、いろいろな人との交流を深めることです。多様な人たちと知り合うことで元気も出るし、人の気持ちを感じる力を養うことができます。裏切られて挫折もするが、その経験は後で活きてきます。経験を通して他人の心の痛みを感じる力を身につけることによって、学問を学んで主体性を持つことが他者や社会で活動することと深い関係があることを理解できるようになるのです。たとえば、病院で働く経験を持つことで、病人の気持ちが理解できるようになると、社会科学や科学技術を学ぶときの深さが変わってくるでしょう。

もう一つ挙げておくと、外国に滞在する経験と外国語（とくに英語）の力を身につけることは、これからの時代には必須のことです。良く学ぶとは、大学のキャンパスの中だけで、おしきせの授業に出席して受け身の勉強で良い成績を取ることではありません。新しい社会を想定して、キャンパスの内外を問わず、自分のために勉学に励むことです。

4．グローバル化の本当の意味と大学改革

グローバル化とは、外国人と話をする機会が増えることではありません。それはグローバル化の結果の一部分ではありますが、グローバル化とは、人、モノ、金、情報が国境を越えて迅速に行き交う社会への、世界を覆う社会変化のことです。したがって、グローバル化は日本の津々浦々でも起こっていることで、一部の大きな大学や一部の大企業だけが騒ぐことではありません。

今年は「大学改革元年」と言われ、日本の大学が大きく変わるきっかけになる年と考えられています。改革の目的は、勉強しなくても卒業できた大学から「答えのない問題に答を見つけ出す主体性」を身につけられる大学に変わることによって、年功序列・終身雇用の予備軍養成所から、上に述べた意味でのグローバル化、新しい社会への変動に耐え得る人材を育成する場へと変貌を遂げることにあります。

現在高校や大学に在籍している人たちは、教育改革の大きな節目に巡り合っています。このことをむしろチャンスととらえ、自分にとって良い大学で良く学べるように、新しい社会の姿、新しい大学教育の姿をイメージできるようにすることが大切だと思います。